

	<p>「本時研究」</p> <p>□ 検証授業として本時を実施する。</p>	<p>⑧ 児童・生徒の変容をみるための事前テストを実施しておく。</p> <p>① 本時授業を通して授業仮説の検証をする。</p> <p>② 検証計画による授業観察・記録の収集を行う。</p>	<p>○ 本時のねらいや本時授業仮説にかかわるテスト（自作）をしておく。検証授業後の変容データが得られるよう適切な統計処理法（SP表の活用等）を工夫しておくことも考慮しておきたい。</p> <p>○ なお、上記⑤～⑧は前・後して推進することも可能である。</p> <p>○ 授業実施者は、先に学年部会・教科部会・全体研究協議会等で作成した学習指導案にもづき、授業仮説の効果が測られるよう配慮して授業を展開するよう心がける。</p> <p>○ 授業観察・記録についても、授業仮説の効果の測定に焦点をあてメモするようにする。例えば、一般的な「抽出児反応行動記録法」においても（仮説や本時の意図によって授業観察の視点は変わってくるが）、仮説としての教師の働きかけに対して児童生徒の反応効果、つまりきと予想外の反応、変容動向等視点を明確にして記録するよう配慮する。必要ならば、「授業観察・記録のしかた」について、事前研修として位置づけ実施することも考慮する。</p>
	<p>「事後研究」</p> <p>□ 授業仮説の効果の検討・まとめをするとともに、改善策を作成する。</p>	<p>① 児童・生徒に対して事後テストを実施し、変容を調べる。</p> <p>② 授業観察記録の整理・診断とそのまとめをする。</p> <p>③ 全員による事後研究会を実施し、変容動向、到達状況・今回の授業研究テーマにかかわる改善策等を検討し合い、授業仮説の有効性をまとめる。</p>	<p>○ 事後テスト（自作）は、事前テストの再テストから（のび率・有効度指数・諸検定等）考察することも可能であるが、授業仮説によっては、必ずしも「指導内容到達度評価」とは限らない。児童生徒の記録ノート・完成作品分析・自己評価表・事後アンケート調査等から、その変容を調べることも必要である。</p> <p>○ まず分担記録者各自が、記録内容から授業仮説の効果（分担内容はどうかであったか、どの点は改善され効果的であったか、どの点が新たな手だてが必要か等）について診断・まとめをし、全体研究協議会に提出する準備をする。</p> <p>○ 各分担記録から提示された「観察・記録まとめ内容」をもとに全体研究協議会で検討・整理・まとめをする。この段階で特に留意したい点は、司会進行にあたって、ア. あくまで授業仮説の有効性に焦点をあてまとめていくこと、イ. 全員が共有化できるよう、数多くの意見を出させ集約してまとめていくこと、ウ. 今回の授業研究の成果を確認するとともに、その成果を学校として（個人として）どう活用していくかを中心にしてまとめていくこと、である。</p>